

よりあい・きたいちがる 地域活性化フォーラム

北荷頃・一之貝・軽井沢集落連携促進協議会(高山榮助会長)が主催する「よりあい・きたいちがる」地域活性化フォーラム『2017 I N オリナス』が2月7日、栃尾産業交流センターおりなすで開催され、来賓に北陸農政局農村計画課四條達弥企画官をはじめ、清水正明栃尾支所長、市農水産課五十嵐智行課長、社会福祉協議会栃尾支所八木元紀会長らを迎えた。

オープニングセレモニーとして、昨年演奏された荷頃中学校校歌のビデオと、栃尾ろばた会の「屁っこき嫁」が上映された。

開会にあたり高山会長が「私共の中山間地では高齢化と過疎化が進んで、後継者不足という構造的な課題を抱えています。昨今、住

民の中には多様な課題もあり、昨年2月に北荷頃、一之貝、軽井沢の3集落で連携促進協議会を立ち上げ、この原動力になっているのは、平成23年から積極的に活動しているNP Oウネで、農業者や障がい者、高齢者が、この中山間地の地域農業を通して生き甲斐、働き甲斐等を目指して地域の活性化に取り組んでいる法人です」と紹介した上で「私共は長年住みなれた地域だけの目線では解決する道はなく、限界があると感じております。その中で、絶えず人と人のつながりを大切にするウネハウスを中心に、この地域で何が出来るか模索しながら、知恵を求めて今取り組んでいます」と挨拶しました。

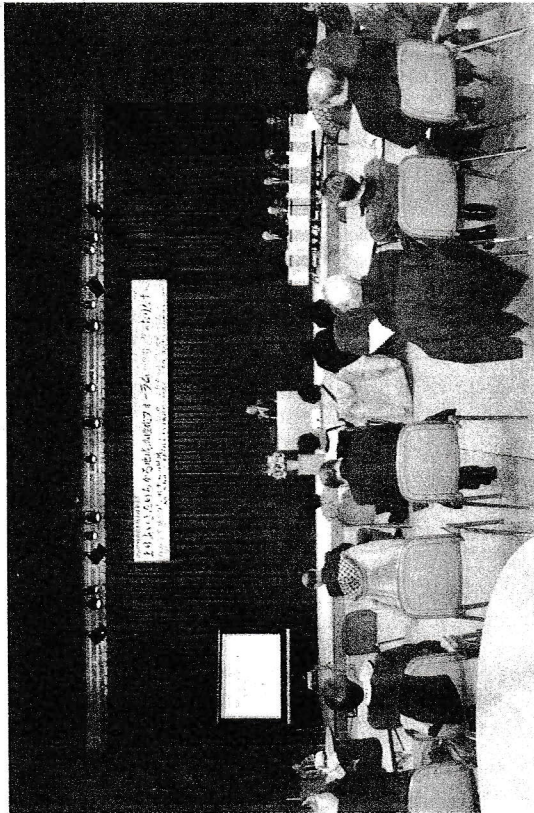
第一部では、同協議会『きたいちがる』の

今後の予定について家老洋事務局長が「我々は今、一之貝でいろんな活動をやっています。米づくりや畑、レストラン、どぶろくも造っていて、買い物サービスも一之貝で展開している。昨年2月に農林水産省の事業で、長岡市社会福祉協議会、農業協同組合、地元夢ハウス緑水工業の特定子会社、地区、区長など様々な方から入って頂き協議会を立ち上げ、一之貝から北荷頃、軽井沢と範囲を拡大し、今までウネでやっていた活動を拡大しよう」と昨年2月19日に協議会を発足させて頂いた」と設立の経緯を紹介し、中山間地の問題点や今後の方向性を次のように語った。

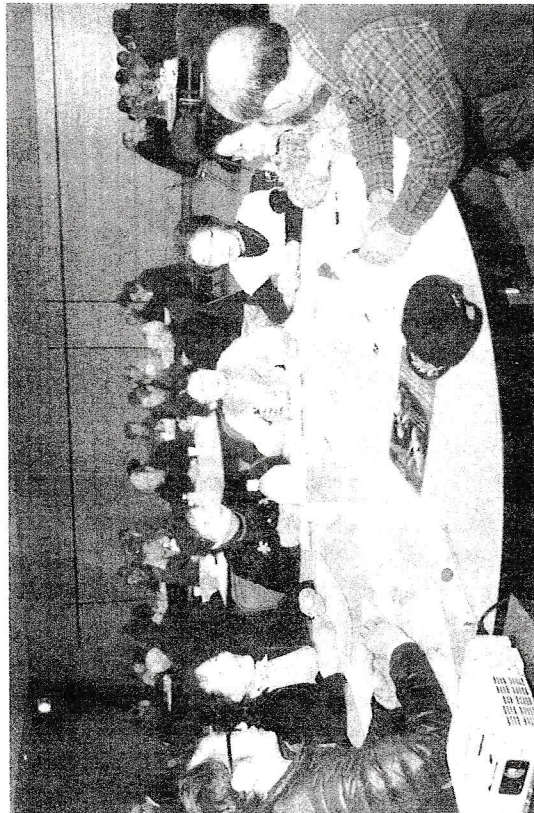
「人口が半分になったという話があったが、昭和37年栃尾市の中学

在校生は3045人、因みに荷頃中は336人。それが昭和63年には1382人となつて、荷頃中は91人。現在は刈谷田中と秋葉中で438人で、栃尾の人口が半分に減つたと言いますが、中学生の数は7分の1に減っている。

何が問題かという点、子どもの数が減つていくということ。一之貝で高校に行くのは大変で、栃尾高校に行くのであれば迎えるが、栃尾高校は総合学科で、工業、商業、農業となると長岡に通わなければならぬ。塾に通わせたい、栃尾にもあるがやはり長岡の方が、しかし親が送迎しないとなかなかそこに行けないと言ふことで若い世代が長岡の方に出て行く。子どもの教育が栃尾に居てはなかなか出来ないということが

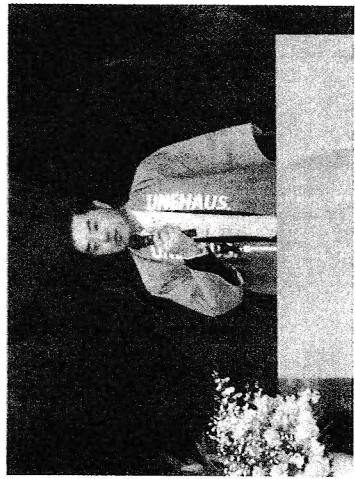


高山榮助会長が地域活性化に向けて結束を訴える



地域の困り事や悩みを忌憚なく話し合う

人口減少の大きな原因になつていないか。全国的に見ても少子化になつて減っているのか。と叩いて決して頭を抱える必要はないと思う。まずは皆んなが幸せに暮らして



家老事務局長が地域の将来について語る

いるのか、ということが一番大事ではないか。一之貝の方々が「ウネが来て良かった」と言っていて聞くが、そういう意味で何かしら活動や運動をすることで皆さんが幸せになれるような社会をつくらなければならないのでは

NPOというのは、我々の活動、理念を支援してくれる人のために仕事をする。政治や行政とは違って自由にやっけて行けるのが良いところ。これをやってみよう」と出来る範囲で直ぐ対応出来る。悪い所は金が無いというところで、それがネックになっている。

皆さん一人でも幸せになれるよう、そういう地域づくりがされれば、この集落は限界集落、あるいは閉村するということにはならないのではないかと感じている。ウネのスタッフ、協議会のスタッフが活動することで若い人達が来るようになった。まだまだ呼びたいと思うがなかなか給料が払えない。今後も頑張つて行きたいと思つている。

そんな中、これから地域をどうすれば良いか考えると、まずは皆さんがやれる事、そして皆さんが困っている事を良く把握しながら「こういった事を結びつけるところという仕事

が出来るといふような事をこれから提案させて頂けないか。

最後に家老事務局長は「一之貝は今、耕作放棄地がどんどん増えており、ここ4、5年で半分近い方がお歳でやめなくてはならなくなるのではないかと、いう懸念もある。今後どうしたら良いかということ、我々よそ者、NPOがある程度中に入りながら考えて行くことが出来るのではないか」と述べた上で、「うちのNPOは何でもやる。やれるように資格も免許も取つてきた。そんな中に若い人が来たり活動できるような仕組みを作つてやつて行きたい。そうすれば皆さんの利便性が上がり、笑顔が増えるのではないかと。笑顔の多い地域にして行きたい」と力強く語った。

引き続き、同協議会の納谷光太郎事務局長が『今までの活動報告』として、首都圏の子ども達との農山村交流(来てくらしえ)、地域特産品の販売・加工支援(買うてくらしえ)、農山村の「食」を活用した観光とグリーンツーリズム(知つてくらしえ)などの報告や、これからの活動予定を報告した。

【第2部、第3部は4面へ続く】

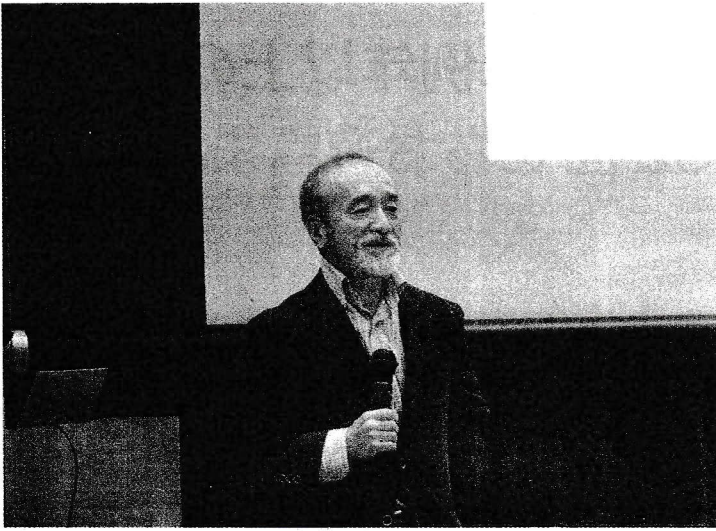
街の月々

◇昨年、北荷頃・一之貝・軽井沢集落連携促進協議会フォーラム

を立ち上げたNPOウネの家老洋代表(同協議会事務局長)が7日、同地区などの関係者に集まってもらい「地域の困りごとをみんなで出し合おう!」とワークショップを開いた。

◇代表の家老氏は、長岡市議会議員を三期務めあげ、平成23年に栃尾地区の中山間地・一之貝地域で地域活動支援センター・ウネハウスを開設。障がい者や高齢者、生活困窮者の仕事、生き甲斐、居場所づくりに取り組んできた。同氏のコラム「おりおり」に、高校まで一之貝に暮らしていた首都圏在住の方が兄弟で、季節旅館「ウネハウス」に宿泊したことを紹介。目的はお墓参りで、これまでは長岡駅からタクシーで一之貝の墓場まで来て掃除と墓参りをし、駅近のビジネスホテルに宿泊。しかし昨年は、ウネが駅に出迎え、ゆつくり墓参りをし、地元と同級生や近所の方達とウネでの夕食会などで「懐かしい昔に戻つた」と感謝が寄せられたことを掲載。

◇ウネでは、病院などの通院、二週に一度の買い物送迎、屋根の雪下ろしといった高齢者一人では出来ない作業を、電話一本で直ぐに駆けつけ対応しているという。今後は協議会の中で話し合い、行政のやる仕事、NPOや協議会の仕事、地域でやる仕事など区分けし事業を展開していく方針で、これらの事が他の地域に波及して行くような形で運動を進めて行きたいという。



鳥獣管理士の米村洋一氏

「里山の保全と獣害対策」 米村洋一氏が講演

【一面より続く】

きたいちかる地域活性化フォーラムの第二部は、基調講演「里山の保全と獣害対策」と題して、全国鹿協合理事で鳥獣管理士の米村洋一氏が講演。

全国鹿協合理事で鳥獣管理士の米村氏は環境問題をやっており、「解決出来たものには必ずビジネスが発生している。空き缶も、問題が発生したのは昭和40年代に入ってから。空き缶で一番困ったのは自治体で、焼いても燃えず、どんどん量が増える。缶は鉄を薄くのばしてあり、鉄の純度が高い。その空き缶を集めてしまえば物凄い価値のある鉄くずになる。全国に広がり、今はリサイクルするの

が当たり前で90%回収している」と一例を紹介し本題に入った。

——「サルが出て大変だ！」と言われるが、人を見たら逃げるといふサルが多い。しかし日常的にサルが出てくる所では、年寄りが一人で住んでいると判ると、家の中で押し入って冷蔵庫を開け食物を取って逃げる。

山梨県と長野県の市町村から頼まれ調べたところ、1980年代に入って山奥でも見なかったサルが里に堂々と出て来て荒らし回った。山が荒れたとか猟師が高齢になり居なくなっただけの理由ではない。それは、昭和47年に欧米で「日本は犬を虐待している。犬を放して餌もやらない」

と欧米で日本製品の不買運動まで起き同年、動物愛護法が出来た。

その結果、里山から犬や野犬が居なくなり里のバリアが崩壊して野生動物の里への侵入が容易になるとともに、農作物の味を覚え栄養豊富で繁殖率も高くなった。サルは人馴れすると人間を恐れない、鳥獣にとつては良い環境となつて来た。

鳥獣害対策として、対症療法だけでなく原因を取り除く。棲み分けの基本「里に近づくと、エサはろくにないに必ず怖い目に遭う」という状況をつくる。「訓練された犬さえないれば万全」というものではなく、犬は被害を減少させる有効な手段の一つで、訓練された

犬を用いて野生動物に恐怖心を植え付け、人里に近づかないようにする。

最後に米村氏は「これらの対策を日常的に活用する」と、サルの対症法の他、最近増えている鹿対策についても事例を交え報告した。

第三部では、よりあいたいちかる「地域の困りごとをみんなで出し合おう！」と、参加者が10グループに分かれワークシヨップ形式でそれぞれ意見を述べ合った。意見では、「働く場が近くにないため、結果的に若者の流出や人口減少につながる」「若者を呼び込むにも産業があまりなく、企業を誘致しても地域内に働か

手が居ないので、結果的にうまく行かないのでは」「跡取りが長岡に出て行ってしまい、高齢化により雪下ろしが困難だ」「先祖から受け継いだ田んぼを持っている。人から耕作してもらっているが、その人も高齢で出来なくなった時が心配だ」「耕作放棄地が増え、それによつて地すべりも発生している」「集落の中にお店がないので、ちょっとした買い物にも困る」等々出された。

事務局は、「いろいろ問題が出て来ているため、もう4〜5回このような会合を持たないと解決策は出ないが、問題に対し事務局でも何が出来るか考え、次回に報告したい」と述べた。